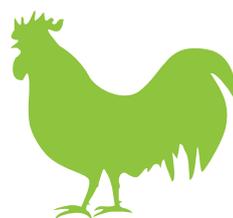


鶏肉

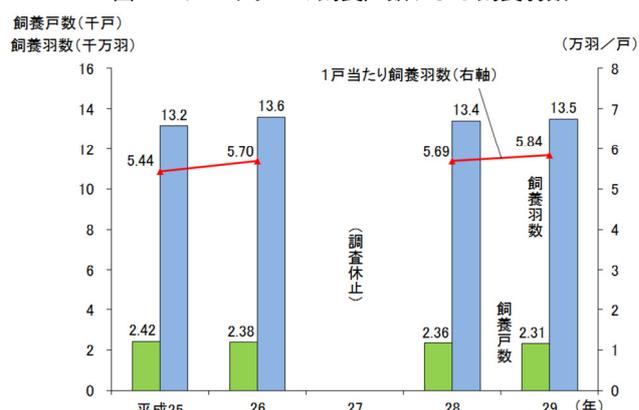


◆飼養動向

29年2月現在の1戸当たり飼養羽数、2.6%増加

ブロイラーの飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に減少傾向で推移しており、平成29年は2310戸（前年比2.1%減）となった。一方、同年のブロイラーの飼養羽数は、1億3492万3000羽（同0.4%増）と前年を上回った。この結果、1戸当たりの飼養羽数は前年から1500羽増加して5万8400羽（同2.6%増）となった（図1）。1戸当たりの飼養羽数が、前年に引き続き増加している要因は、品種改良による増体能力の向上や大手企業によるインテグレーションの進展などにより、生産の集約傾向が強まっているためとみられる。

図1 ブロイラーの飼養戸数および飼養羽数



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：各年2月1日現在。なお、29年は概算値。

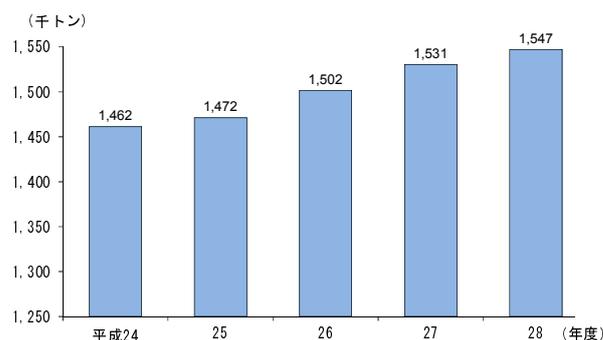
2：平成27年は世界農林業センサスの調査年のためデータなし。

◆生産

28年度の鶏肉生産量、6年連続増加で過去最高を更新

鶏肉の生産量は、品種改良や飼料改良による増体成績の向上、消費者の健康志向の高まり、国産志向などを反映して、増加傾向で推移している。平成26年度は、他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な消費を受けて、150万1849トン（前年度比2.1%増）と前年度をわずかに上回った。27年度以降もこの傾向が継続し、27年度は153万541トン（同1.9%増）、28年度は154万7321トン（同1.1%増）といずれも前年度をわずかに上回り、過去最高を更新した（図2）。

図2 鶏肉の生産量



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注：骨付き肉ベース。

◆ 輸 入

28年度の鶏肉輸入量、2年連続の50万トン超え

鶏肉

鶏肉の冷蔵品は消費期限が短いことから、輸入品の大半は主に加工・業務向けに利用される冷凍品である。

冷凍品の輸入量は、平成26年度は加工・業務用需要の増加や25年末にタイ産の輸入停止措置が解除されたことなどを背景に、49万8643トン（前年度比22.9%増）と大幅に増加した。27年度は、国産鶏肉の相場高や、輸入価格（CIF価格）の低下などから、55万881トン（同10.5%増）と14年ぶりに50万トンを超える水準となった。28年度は、引き続き輸入価格が低下したことなどから、52万5764トン（同4.6%減）と2年連続で50万トンを超える水準となった（図3）。

図3 鶏肉の輸入量および輸入価格



資料：財務省「貿易統計」
注1：実量ベース。
注2：生鮮、冷蔵品を除く。

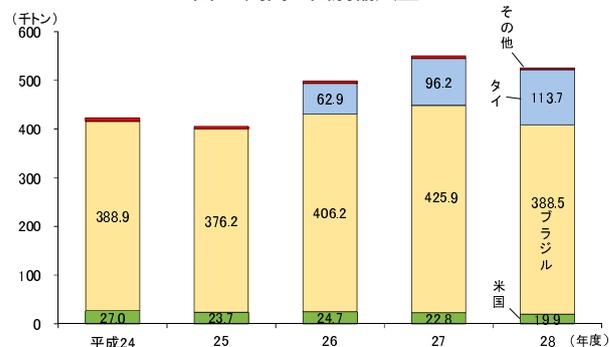
冷凍品の輸入量を国別に見ると、全体の約7割を占めるブラジルが最大の供給国であり、タイ、米国がそれに続く。

ブラジルからの輸入量は、28年度は現地生産コストの上昇などにより、38万8506トン（同8.8%減）とかなりの程度減少した。

タイからの輸入量は、16年1月の高病原性鳥インフルエンザ発生に伴う輸入停止措置が25年末に解除となって以降、急増している。28年度は、前年度に続き好調な輸出需要を背景に現地の増産意欲が高かったため、11万3735トン（同18.2%増）と大幅に増加した。

米国からの輸入量は、クリスマス需要向けなどの骨付きもも肉が多くを占めている。17年度以降、高病原性鳥インフルエンザ発生の都度、発生州に対し輸入停止措置が取られている。28年度は米国内外の堅調な需要を背景に、1万9934トン（同12.4%減）となった（図4）。

図4 鶏肉の国別輸入量

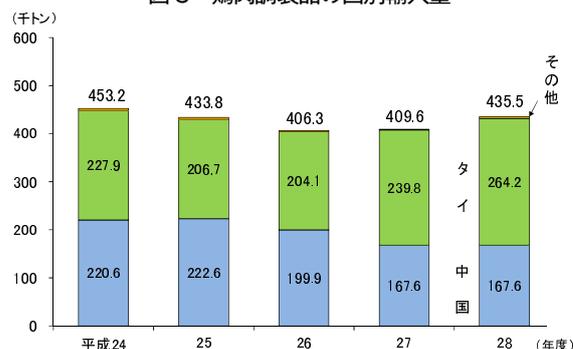


資料：財務省「貿易統計」
注：実量ベース。

鶏肉調製品

鶏肉調製品（加熱処理された唐揚げ、焼き鳥、チキンナゲットなど）の輸入量は、近年、食の外部化（外食、中食など）の進展や主要輸入相手国での高病原性鳥インフルエンザの発生などを背景に、増加傾向で推移していた。鶏肉調製品は、主に加熱処理施設が多数存在する中国、タイから輸入されており、平成 26 年度は、7 月に中国産「消費期限切れ鶏肉」問題が発生した影響により、中国からの輸入量が減少し、40 万 6308 トン（前年度比 6.3%減）とかなりの程度減少した。27 年度は、前年度並みの 40 万 9641 トン（同 0.8%増）となったが、中国産からタイ産へのシフトが顕著となった。28 年度は、中国からの輸入量は前年度並みとなった一方で、タイからの輸入量が増加し、43 万 5544 トン（同 6.3%増）となった（図 5）。

図 5 鶏肉調製品の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」

注：160232290（基本関税率 8.0%、ただし、WTO 加盟国（中国）は 6.0%、EPA 締結国（タイ）は 3.0%）。

◆消費

28 年度の推定出回り量、2 年連続で 200 万トン超え

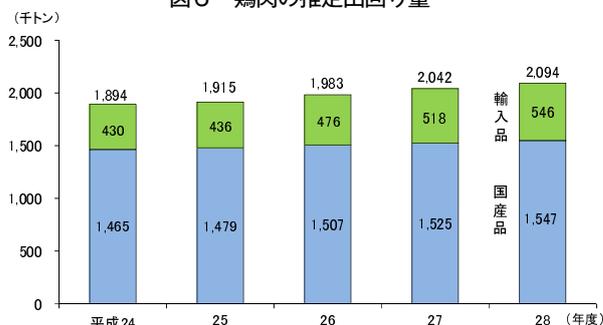
鶏肉の推定出回り量は、近年、他の食肉に対する価格優位性に支えられた需要増大や消費者の健康志向などを背景に、増加傾向で推移している。

平成 28 年度は、209 万 3773 トン（前年度比 2.5%増）とわずかに増加し、過去最高を更新した。

全体の約 4 分の 3 を占める国産品は、中国産「消費期限切れ鶏肉」問題が発生した影響を背景とした消費者の国産志向の高まりなどを受けて、増加傾向で推移しており、28 年度は 154 万 7412 トン（同 1.5%増）となった。

一方、輸入品は、鶏肉調製品との競合や現地相場の変動などにより、22 年度以降、43～44 万トン程度で推移しており、26 年度は消費者の経済性志向や加工・業務用需要の高まりから輸入量が増加したことにより、47 万 6274 トン（同 9.3%増）とかなりの程度増加し、27 年度も 51 万 7608 トン（同 8.7%増）とかなりの程度増加した。28 年度も引き続き輸入量が増加したことから、54 万 6361 トン（同 5.6%増）とやや増加した（図 6）。

図 6 鶏肉の推定出回り量

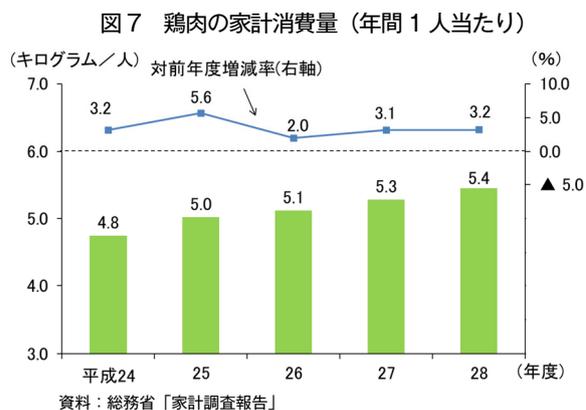


資料：農林水産省「食鳥流通統計」、財務省「貿易統計」より農畜産業振興機構で推計

注：実量ベース。

家計消費

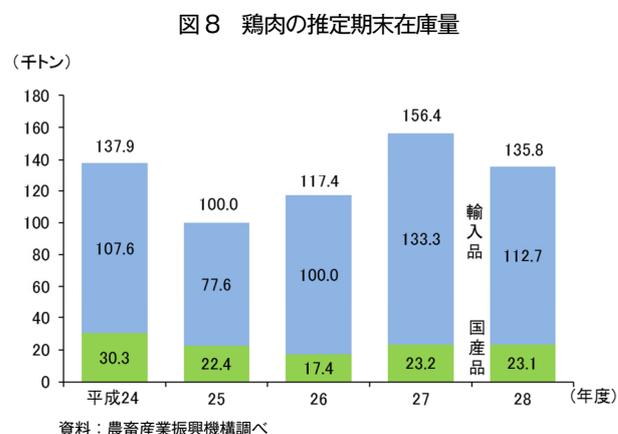
鶏肉消費量の約4割を占める家計消費量は、他の食肉に対する価格優位性や消費者の健康志向を反映し、平成26年度は、年間1人当たり5.1キログラム（前年度比2.0%増）、27年度は同5.3キログラム（同3.1%増）、28年度は同5.4キログラム（同3.2%増）と増加傾向で推移している（図7）。



◆在庫

28年度の推定期末在庫量、13.2%減少

鶏肉の推定期末在庫量は、その8割以上を輸入品が占めることから、輸入量の変動に大きく左右される。平成26年度は、国産品が減少した一方で、輸入量が増加した結果、11万7368トン（前年度比17.3%増）と大幅に増加した。27年度は、出回り量が好調に推移した一方で、需要を上回る高水準の輸入量となったため、15万6444トン（同33.3%増）と大幅に増加した。28年度は、前年度の反動により、13万5759トン（同13.2%減）とかなり大きく減少した（図8）。



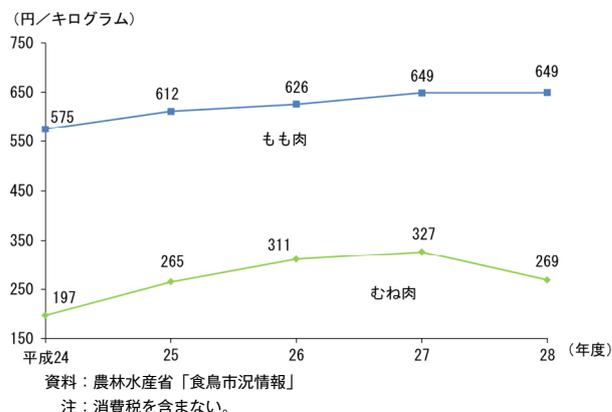
◆卸売価格

28年度の鶏肉卸売価格、むね肉は低下

国産鶏肉の卸売価格（ブロイラー卸売価格・東京）のうち、主にテーブルミートに仕向けられる「もも肉」については、平成26年度は他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な消費を受けて、1キログラム当たり626円（前年度比2.4%高）とわずかに上昇し、27年度も、この傾向が続き、同649円（同3.7%高）となった。28年度は、年度後半に輸入量が減少し、供給がタイトになったことを受けて、同649円（同0.1%高）と前年度並みとなった。

一方、蒸し鶏などの総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用利用の多い「むね肉」は、26年度は加工・業務用需要の増加により、同311円（同17.5%高）と大幅に上昇し、27年度も同327円（同5.0%高）と上昇した。しかし、28年度は高水準に積み上がった在庫を背景に、同269円（同17.8%安）と低下した（図9）。

図9 国産鶏肉の卸売価格



◆小売価格

28年度の小売価格（もも肉）、横ばい

鶏肉の小売価格（もも肉・東京）は、平成26年度は他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な需要を反映し、100グラム当たり135円（前年度比6.4%高）とかなりの程度上昇した。27年度以降もこの傾向が継続し、27年度は同136円（同0.7%高）と上昇したが、28年度は同136円（同0.2%安）と前年度並みになった（図10）。

図10 鶏肉の小売価格（もも肉・東京）

